



良質な素材と高い技術に支えられた100年建築

銅御殿

最高の材料と職人技が光る“銅に覆われたお屋敷”

大正元年。東京都文京区小石川の緑に囲まれた坂の途中に、木造3階建ての豪華な邸宅が竣工した。通称「銅御殿」。その名の通り、屋根、外壁には銅板がふんだんに使用されている。

銅御殿を建てたのは、植林業などで財を成した実業家の磯野敬氏である。磯野氏は、当時21歳の若き棟梁・北見米造の腕を見込み「時間と金はいくらかかってもかまわない」と言って屋敷の建設を注文したという。その建設には、貴重な材料がふんだんに使われた。柱には木曽の檜を一山買い付けて使用したほか、東京から200キロ南の海上にある御蔵島の桑、今では入手困難な屋久島の杉、ベルギーから輸入した板ガラスなどが資材として用いられた。棟梁のもとには腕のいい職人が大勢集まり、高い技術と時間が惜しみなく注がれた。

屋敷の設計にあたり、磯野氏が注文したのは「地震に絶対に倒れず、火事で燃えてしまわないこと」だった。屋根、外壁に銅板が採用されたのはこのためだという。現在でも3階部分の銅屋根・銅壁は当時のまま活躍し続けている。見事な緑青に覆われたその姿は力強く、100年近くにおよぶ長い歴史を耐え抜いた風格を漂わせている。

後世に伝えたい歴史的な建築

屋敷はその後、石油王・中野貫一氏の手に渡り、その後、ホテルニューオータニの創業者・大谷米太郎氏の長男・大谷哲平氏が三代目の当主となった。三代目当主が亡くなった後、日本大学名誉教授・大谷利勝氏が四代目当主を引き継ぎ「関東大震災にも、空襲にも耐え抜いたすばらしい建物を後世に残したい」という強い思いから、弟の智章氏とともに自らが館長を務める(財)大谷美術館に寄付することで保存することになった。現在、銅御殿は旧

古河邸と連携して管理・保護されている。

都市開発の影響で古い建物が次々と取り壊されていくなか、銅御殿は東京に残る貴重な文化財のひとつである。今年でおよそ95年を経た銅御殿は、その歴史的価値が認められ、平成10年には国の登録文化財に、平成17年12月には重要文化財に指定された。一方で、最近では屋敷の隣接地にマンションの建設が予定されており、建物への影響が懸念されている。現在は計画の見直しを求めて地域住民が活動が続いている。一度失えば二度と再現できないほど高い技術と、何ものにも変えがたい歴史が詰まった銅御殿。趣深い緑青に覆われたその姿が、いつまでも続くことを願いたい。



日本大学名誉教授・
(財)大谷美術館館長
大谷 利勝氏



歴史を感じさせる緑青色の銅壁



1階部分の銅屋根。小さく板どりをすることで波打ちを抑えている。



見事に組まれた表門。扉は楠の一枚板を使用している。